

English Cafe vol.10

Final issue

特集

言葉の力を信じて！

今日から始めるAll Englishの授業。



KAIRYUDO



言葉の力を信じて！

良い言葉には幸せが舞い込む！言葉の力はミラクル！

「土が乾いたら水をやり、あとは成長を信じて待つだけ！」植物を上手に育てる人にそのコツを尋ねると、「見守りと言葉がけ」という答えが返ってきます。科学的な根拠はさておき、野菜や果物に音楽を聴かせたり話し掛けたりすると、育ちが良くなると聞いたことがあります。

マグカップ大の鉢から育て、何度か植え替えをしたコーヒーの苗木が、青々と葉を広げる立派な観葉植物になりました。葉の緑が濃さを変えながら伸びていく様子に頼もしさを感じます。コーヒーの木への栄養となるように、次は花が咲くまで声掛けを続けたいと思います。



古くから日本は「言霊の幸（さきわ）ふ国」と呼ばれてきました。言葉には霊力が宿り、幸福をもたらすと信じられてきたのです。「良い言葉は良い未来を呼ぶ」とも言われます。発する言葉一つで場の空気感が変わる—そんな「言葉の力」を、私たちは日々の暮らしの中で感じているのではないのでしょうか。

赤ちゃんの母語習得も、言葉の力を映し出す出来事です。愛情あふれる語り掛けは「喃語（なんご）」を引き出し、親子の絆を強くします。最初はただの音の連なりだったものが、次第に感情と溶け合い、やがて言葉へと変わっていきます。健やかに育ててほしいという親の願いが優しくブレンドされ、子供の豊かな成長を後押しする言葉として響くのです。



このような、良い言葉のもたらす教育的効果を学校現場でも多くの教師が実感し、言葉を大切にしながら日々授業を行っています。

今日から始める All English の授業

言葉の力と言えば、ある若手教師の挑戦が思い出されます。彼は小学校から中学校へ異動し、先輩教師から「英語の授業は英語で進めよ！」という助言を受けました。英語の教員免許は持っているものの、英語を話すことにはあまり慣れていません。指導するクラスには帰国子女もいます。授業を投げ出すわけにもいかず、彼は指導書や解説書を熟読し、時間を惜しんで教材研究を重ねました。フレーズを思い出しながら英語を絞り出し授業を進めることもありました。教科書の内容を英語で導入し、やり取りを通して理解させる「オーラル・イントロダクション」には苦勞しました。

しかし、彼はどこまでも愚直に「英語で行う授業」にこだわったのです。半年が経った頃、不思議な変化が起こります。英語の指示を集中して聞く生徒が増えてきたのです。ほめ上手な彼は、短い英語で頻繁に生徒たちを称賛しました。気が付くと授業の空気感が変わり、生徒の発話にも英語が増えていました。

一語一語に込められた「英語で伝えたい」という教師の思いが、生徒の心に響いたのかもしれませんが。冷ややかに見えた帰国子女の表情にも笑顔が浮かぶようになりました。それは、英語で話すことをあきらめなかった教師への、敬意の表れに違いありません。



文部科学省の全国学力・学習状況調査では、「英語による言語活動」や「教師の授業内での英語使用」が生徒の英語力の改善や充実につながるということが明らかになっています。つまり、教師が英語の持つ魅力や可能性を信じ、教室にできるだけ多くの英語を響かせることには大きな意味があるのです。

「英語で行う授業」には、授業改善の糸口があります。継続することで、教師自身の英語力向上や自信にもつながります。パーフェクトである必要はありません。まずは積極的に英語を使っていきましょう。

英語が満ちる教室では、次々と言葉の力のミラクルが生み出されるはずですが。今年 All English の授業を目指し、その第一歩を踏み出してみたいはいかがでしょうか。



子どもが主体的に英語学習に取り組もうとする授業を目指して ～ICTの活用と単元のゴール設定の工夫～

—— 岩手県盛岡市立緑が丘小学校 / 中坂 将晴 Nakasaka Masaharu

1. はじめに

担任経験を経て、昨年度から担任外として小学校の外国語科の授業を受けもっています。そんな自分にとって、All Englishの授業にはまだまだ壁を感じます。理由は一つ、自分自身の英語力の問題です。しかしながら、「ICTの活用」と「単元のゴール設定の工夫」によって、自分の英語力を補いつつ、子どもの英語力を伸ばすことは可能だと考えます。

そこで今回は、自分が目指す「子どもが自分で英語力を身に付ける」ための実践を紹介します。

2. ICTの活用

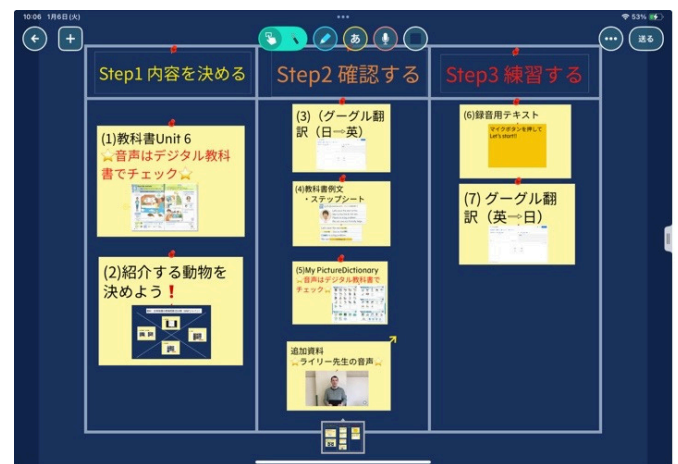
【STEP 1：デジタル教科書の活用】

まずは、英語の音声をインプットする際に、デジタル教科書を活用しない手はありません。単元の第1時で見通しをもった上で、第2時には、ゴールの姿となるデジタル教科書の動画を子どもと一緒に繰り返し視聴します。音声に十分慣れ親しんだ後は、動画の字幕機能を使います。文字を指し示しながら声に出してみるよう促すことで、子どもは慣れ親しんだ音声と文字を結び付けて、文字を読んだのアウトプットもできるようになります。

【STEP 2：資料提示】

次に、授業の中で事前に用意した資料を提示します。この資料は、教科書や翻訳サイト、録音用テキストなどの資料を整理したものです。この資料をロイロノートで送ります。

この資料を「伝える内容を決める」「音声や文字を確認する」「練習する」の3つの段階に分けて用意しておくことで、子どもが自分で調べたり、確認したり、練習したりすることができるようにします。



〈図1 資料提示〉

【STEP 3：翻訳サイト】

さらに、上記の資料の中にも示していますが翻訳サイトの活用を促します。用意するものはマイク付き片耳イヤホンです。(100円ショップなどで購入できます。)

翻訳サイトの活用方法は二つあります。一つ目はインプットです。子どもは、自分の伝えたい内容の英語を聞いて自分で調べます。また、英語表現を覚えるために、イヤホンを付けて繰り返し何度も聞きます。もう一つはアウトプットです。自分の英語の音声が正しく和訳されるかどうか、マイクに向かって話すように促します。子どもは、自分の音声が正しく認識されることに挑戦し、何度もアウトプットします。



〈図2 翻訳サイトでのインプット・アウトプット〉

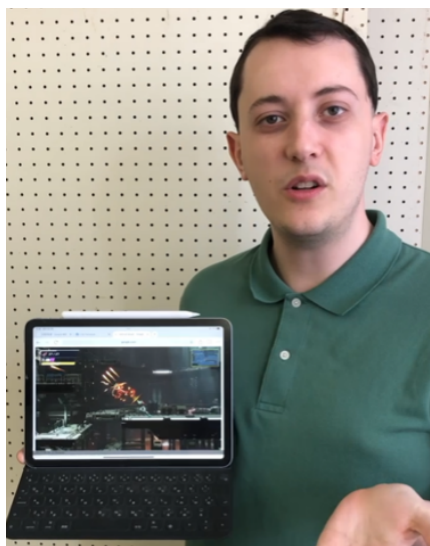
3.単元のゴール設定の工夫

【STEP 1：ALTの活用】

単元のゴールとして、伝える相手をALTにすることのメリットがいくつかあります。

①**1対1で英語のやり取りをする場を設定**することができます。そうすることで、個に応じたやり取りが可能で、事前の打合せによって、ALTに質問をしてもらったり、質問に答えてもらったりすることもできます。

②**英語の難易度を気にせず表現**することができます。子ども同士では、調べた表現を相手に伝わるように簡易な表現に変換して伝えようとしていますが、ネイティブのALTには、未習の表現でもそのまま使ってみようとチャレンジすることができます。



〈図3 本校のALT〉

【STEP 2：留学生との交流】

ある単元では、単元のゴールとして週末の過ごし方を、近隣の大学の留学生に伝えることを設定しました（留学生は県の国際交流センターを通じて、紹介してもらいました）。ALTを相手にやり取りする際と違って、自己紹介を含めた内容で伝えることができたり、伝わった時の達成感をより感じることもできたりしました。

さらに、授業の導入と一緒にゲームをしたり、英語での質問タイムを設けたりすることで、異文化交流にもつなげることができました。



〈図4 留学生〉

4.おわりに

小学校の外国語活動・外国語科の授業の経験を通して、自分の英語力が付いたと感じることは恥ずかしながらほとんどありません。一方で、「ICTの活用」と「単元のゴール設定」によって、子どもの学習を支援していくことが、子どもが自ら英語に慣れ親しむ姿が見られるようになりました。

これからも子どもが主体的に英語に慣れ親しむきっかけを設定できるよう、「ICTの効果的な活用」はもちろん、「ねらいが明確になる単元づくり」を目指して、実践していきたいと思えます。

All Englishの授業を目指して

～英語でつながる、英語で広がる教室づくり～

秋田県由利本荘市立小友小学校 / 阿部 智保子 Abe Chihoko

1. はじめに

「授業はなるべく英語で行いましょう！」
前任校で言われたときには、「とてもそんなことはできません！」とびっくりしたことを今でも覚えています。

赴任した当時、前任校では文部科学省の「英語教育強化地域拠点事業」の委託を受け、全校で英語教育の充実に取り組んでいました。教師が英語を使って授業を行うことで、子どもたちが英語に触れる機会を増やそうという思いからの提案でしたが、自分を含め、英語が得意でない教員にとっては不安しかありませんでした。お互いに励まし合い、意見を出し合いながら、All Englishの授業づくりを行ったことを昨日のこのように思い出しますし、あのときの経験が今の授業づくりにも生かされています。

私の実践が、同じ悩みを抱え、がんばっている先生方の参考になれば幸いです。

2. All Englishの授業づくりのために

【Classroom Englishの共有】

「英語で授業を」と言われても、自分自身も英語で授業を受けた経験がなかったため、はじめはどこで何をどうすればいいのか、全くイメージをすることができませんでした。そこで、どんな言い方ができるのか、どんな表現を使えばいいのかを研修するところから始めました。由利本荘市教育委員会から「Classroom English一覧表」が各校に配付されていたので、一覧表を使って表現の確認を行い、まずはあいさつや簡単な指示ができることを目指しました。

全校で同じ表現を使うことで、学年が変わったり、担任が替わったりしても、戸惑わずに授業を進められるのも大きな利点だと思います。

Classroom English一覧は、

①あいさつと簡潔な指示

②指示・ほめ言葉(1)

③指示・ほめ言葉(2)

④ALTへの依頼等

の4つがあります。

Classroom English Part①あいさつと簡潔な指示				
Part①のポイント：「できるだけ簡潔に」「はっきり・ゆっくりに・大きな声で」				
※児童・生徒に指示を出す際には、文頭か文末にpleaseを付けて使うようにしましょう。				
Japanese	English	Check①	Check②	Check③
①おはようございます。/ こんにちは。	Good morning. / Good afternoon.			
②英語の授業を始めましょう。	Let's start English class.			
③立ってください。	Stand up.			
④座ってください。	Sit down.			
⑤私を見てください。	Look at me./Watch me. (注意を向ける)			
⑥私たちの方を見てください。	Look at us./Watch us. (注意を向ける)			
⑦この絵(写真)を見てください。	Look at this picture.			
⑧(先生たちが) やってみますね。	We'll demonstrate.			
⑨私の後について繰り返してください。	Repeat after me.			
⑩ALTO先生の後に続いてね。	Repeat after OOsensei.			
⑪(先生の話を) 聞いてください。	Listen to me.			
⑫ペアになって。	Make pairs.			
⑬(3人)グループになって。	Make groups (of three).			
⑭机の上をきれいにして。	Clear your desks.			
⑮ペンを出して。	Take out your pens.			
⑯机を元にもどしてください。	Return your desks.			
⑰時間です。	Time is up.(Time's up.)			
⑱書くのをやめてください。	Stop writing.			
⑲今日はここまで(で終わり)です。	That's all for today.			
⑳さようなら、またね。	Goodbye. / See you.			

〈図1 Classroom English一覧〉

【Lesson Planの作成】

英語が得意でない小学校教員の悩みの一つに、ALTとの打ち合わせがあります。授業の流れや活動の内容を英語で説明することはとても難しいことですが、事前に打ち合わせを行うことで、授業をスムーズに進められるようになります。

何をするか分からずに授業に参加するのはALTにとって大変なことだと思うので、授業の前にお互いの役割分担がしっかりできていることが理想です。では、難しい打ち合わせを行うにはどうすればよいのでしょうか。

取り組みの一つに、Lesson planの作成があります。授業の流れはもちろん、学習する単語や表現、ALTやHRTのせりふややり取りなど、できるだけ詳しく、具体的に英語で書き込むようにします。毎時間の作成は簡単なことではありませんが、作成することで授業の流れが見え、準備するものや子どもへの支援も考えることができるようになります。作成したLesson planは校内で共有できるよう蓄積します。

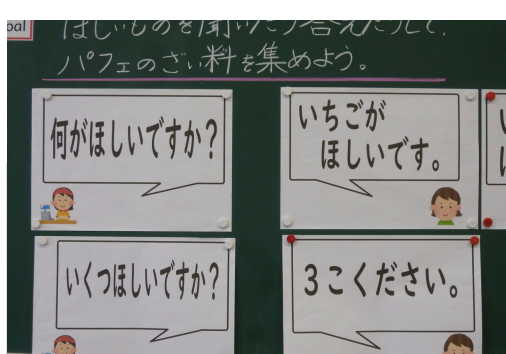
Lesson planがあれば、時間のないときでもALTに授業の内容を確認しておいてもらうことができるので、とても有効な方法です。

R7 3rd grade Lesson Plan			
学級 Class	1	日時 Date&Time	Wed. Nov. 8th The 4th period (11:25-12:10)
担任名 HRT	HRT: ALT:		
単元名	This is for you. カードを贈ろう①		
本時のねらい Today's Goal	◇形の言い方に慣れ親しむ。		
時間(分)	主な活動と指導の動き	指導者の指導・支援	
3	1 Greeting Let's start.	HRT	ALT
7	2 Today's goal いろいろな形の言い方を知ろう。	Sup: Open your textbook to page HRT: Wow! Many shapes! Sup: Yes! 正方形、長方形、丸、三角… New unit's point is 形! "Shapes". HRT: "Shapes"! Let's study 形の言い方! Let's write today's goal!	
15	3 Practice the word Let's practice. circle / triangle / square / rectangle / heart / diamond / star / oval / ※Missing game Let's try missing game! Open your textbook to page 27. Let's try shape quiz!	○Pronounce the words. ①Close your eyes. ※Hide a card ②Open your eyes. ③ What's missing?	
15	4 Let's play① (P27)	○Prepare the DVD. ○Help childrens. ○Talk with children ※What shape is this? ※Do you like dogs?…	
5	6 Reflection 7 Greeting That's all for today.	○Give some comments. Time is up. Feedback time!	

〈図2 Lesson plan抜粋〉

【授業の実際】

All Englishで授業を進める教員も大変ですが、授業を受ける子どもたちも不安な気持ちでいっぱいだと思います。子どもたちが安心して授業に参加できるよう、ジェスチャーをつけながら話をするよう心がけています。鉛筆を持ってほしいときは、実際に鉛筆を見せながら、“Pick up your pencil.”と伝えます。



〈図3 板書例〉



〈図4 授業風景〉

どんなときでも、言葉と動作、物を結びつけることで、初めて聞く英語も意味を理解できるようにします。また、絵や写真、カードなど、手がかりとなる物を示すようにしています。3・4年生の子どもたちは英語が読めるわけではないので、特に3年生では、英語の表記はせず絵や日本語のみのカードを用いることが多いです。単語だけでなく、やり取りも絵カードを示しながら話すことで、新しい表現に慣れ親しむことができるようになります。

3.おわりに

いろいろな手立てを講じることで、絶対に自分には無理だと思っていたAll Englishの授業もできないわけではないことが分かりました。

子どもたちも、英語で授業が進んでいくとなると集中して聞こうとします。言いたいことがうまく言えずに困ることはもちろんありますが、言える言葉や伝える方法を探して、なんとか伝えようとしている自分があります。目の前で一緒に学んでいる子どもの姿と同じだと思うと、四苦八苦している姿も子どもたちの手本となっているのではないかと思えるようになりました。無理のないように、でも何か一つでも新しい表現を増やすことができるように、これからもがんばります。

子どもたちが私たちに「沈黙」で伝えていること ～All Englishの授業で日本語を使ったらいけないの？～

—— 山形県尾花沢市立福原中学校 / 水田 怜樹 Mizuta Rei

1. はじめに

私たちや子どもたちは、言葉の力をどのくらい信じているのでしょうか。理解できない英語が飛び交う授業に、子どもたちは主体的に参加しようと思えるのでしょうか。子どもたちの沈黙が怖くて、ついつい日本語で全て説明してしまう場面はありませんか。わかる子どもたちの反応だけに甘えて、目の前の子どもたち全員が本当に理解したいこと、本当に伝えたいことから目を背けてはいないでしょうか。

私たちの「言葉」は、英語であれ日本語であれ、目の前の子どもたちが思考したり、判断したり、表現したりするためのヒントを与えています。

2. 授業の概要

中学校2年生における教科書本文のリーディングの授業（見開き2ページ分の2時間目）を例にしてみます。

私の話す英語には、

「英語での指示」

（例：Hunt “available” in your textbook.）

「英問英答での事実確認」

（例：What is ○○ doing in this picture? / What is ○ in Japanese?）

「英語による推論発問」

（例：If she comes back to Japan again, what Japanese culture should she try next? What do you recommend?）

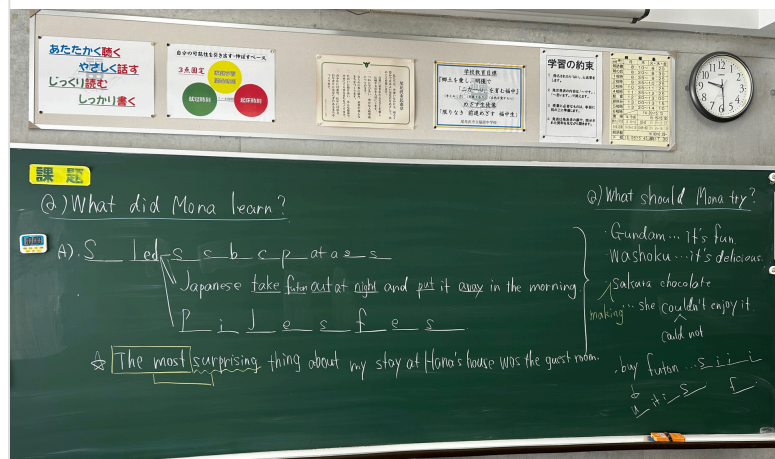
がありますが、例外なく「子どもたちが沈黙する」場面が出てきます。

3. 子どもたちの沈黙が 私に教えてくれたこと

私は目の前の子どもたちが黙ったそのときに、彼らの頭の中がどう動いているのかを捉えてみえています。「私の英語を理解するために考えているのかな?」「私の英語が伝わっていないのかな?」「どう答えようかと頭の中で英語を組み立てているのかな?」などです。

沈黙している時の子どもたちの表情、仕草、つぶやき（日本語含む）から「この間は何を意味しているのか」を瞬時に考え、「問いの英語を子どもたちが理解できる語彙で置き換えようかな?」「そもそもの問いを変えてみようかな?」「子どもたちがこれまで学んできた話題について（視覚的・音声的に）触れてから本質（本時の課題など）に戻ろうかな?」ということを判断し、私の問いをつなげて子どもたちに伝え、やり取りをしていきます。

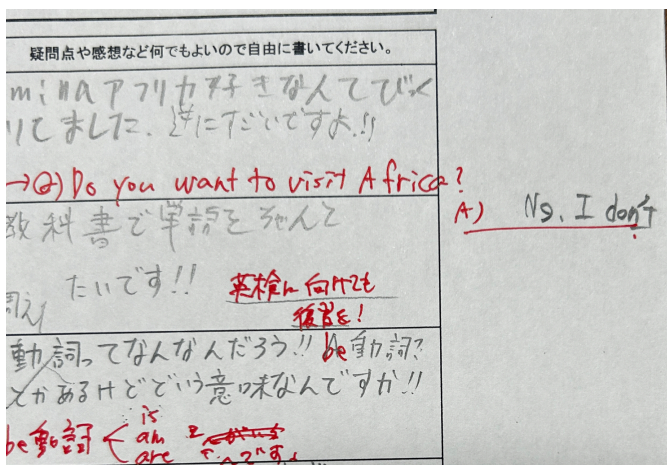
問いを変えていくと、子どもたちの表情も柔らかくなっていきます。英語という言葉を通して、子どもたちの頭の中の思考を整理していく。そのための「言い換え力」は私たちの英語力と比例するものと捉えています。



〈図1 つぶやきをひろい、板書で整理する〉

4. 英語で考えるための日本語

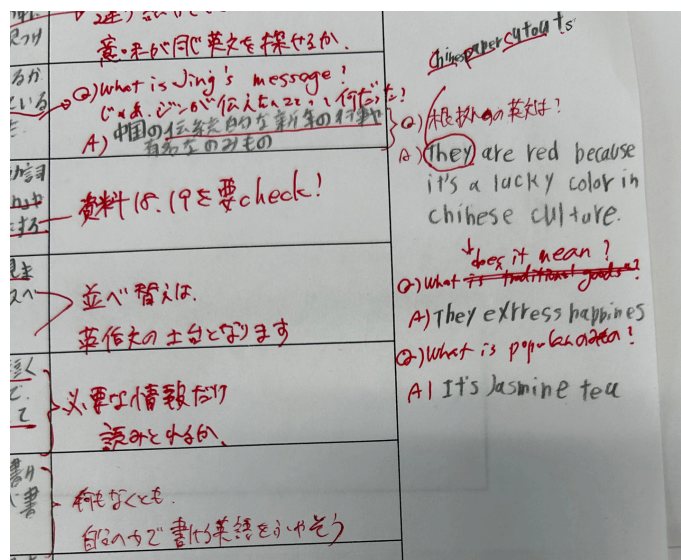
このリーディングの授業では、その日に解決したい問いについて、すべて英語でやり取りしながら授業を展開していました。ただ、新出文法の意味や用法の確認、まとめの段階では「結局、この問いの答えって何?」「〇って何を伝えたかったの?」ということをあえて日本語で問いかけました。英語が得意な子どもたちはこのような場面を英語で進めても答えられますが、苦手な子はやはり黙ってしまいます。問いが日本語になった瞬間、苦手な生徒も口を開き始めます。そのような生徒の言葉を聞きながら、本時の学習内容を理解しているかどうかを個別に評価します。「思考を表出させるために、効果的に日本語を使う」イメージです。



〈図2 問い返しによるやり取り①〉

5. 英語へ戻すための問い返し

さらに、子どもの学びを価値づけするのも言葉です。例えば、振り返りで「登場人物が〇〇したことがわかった」という生徒の記述があれば、「Q: その根拠の英文は?」と問い返し、教科書本文の記述を抜き出させます。例えば、記述に関連して「Q: Do you want to visit Africa?」と問い返し、英語で答えさせれば、文字による英語のやり取りを生み出せます。そのやり取りを生徒が見返せば、単元内における思考の流れが言葉で可視化されます。

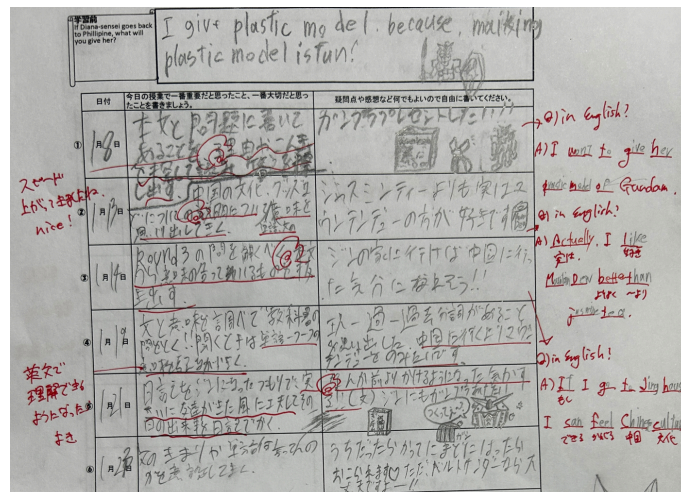


〈図3 問い返しによるやり取り②〉

6. おわりに

All Englishの授業とは、単純に英語を聞く・話す・読む・書く場ではなく、子どもたちの思考を英語や日本語の「言葉」を通して見取り、「言葉」で支え続ける場であると捉えています。実際、「英語だけが話されている空間では授業の内容を理解することは難しい」と捉えている子どもたちもいます。

「言葉」の力を信じて、これからも子どもたちに英語で問い続け、子どもたちの反応を見取りながら、必要なところで日本語を使って立ち止まり、もう一度英語に戻す…そんな「言葉」のやり取りの繰り返し、テストの点数では表されない「わかった」「できた」という学びの実感につながるはずです。



〈図4 学びの可視化を促す振り返り〉

大切なのは「生徒が何をして、何を評価するのか」 そのためのAll English

—— 福島県二本松市立二本松第二中学校 / 市川 竜朗 Ichikawa Tatsuro

1. はじめに

日頃、All Englishを意識して授業を実践する中で強く感じていることがあります。それは、All Englishの価値は単に「英語を増やすこと」そのものにあるのではなく、生徒が英語で理解し、英語で動き、英語で表現するための学習環境を教師が設計できる点にある、ということです。以下では、私が普段から特に意識している点を、4つの観点から整理します。

2. 教師の発話も、生徒にとって重要なインプット

生徒にとって、語彙や文法を「知っている」だけでは不十分で、「実際の使用場面でどう聞こえ、どう使われるか」に繰り返し触れることが不可欠だと思います。授業内で最も安定して英語を供給できるのが教師だと思います。教師の英語は、教科書本文と違い、目の前の状況に合わせて調整できるため、いわば「生徒の理解に最適化されたインプット」にすることができます。



〈図1 本時のねらいを共有している様子〉

- ・ 同じ意味を複数回、言い方を変えて提示する
(言い換え・再述)
- ・ 短く区切る (1文を短く、情報量を絞る)
- ・ キーワードを強調して繰り返す
(重要語のリサイクル)
- ・ ジェスチャー・指さし・板書で理解を補助する

3. 授業で大切なのは「生徒が何をするか」 教師の発話は最小限で

授業で大切なのは、「教師が何を話すか」ではなく、「生徒が何をするか」であり、授業の中心は生徒の活動（理解→処理→表現）だと考えています。この視点を中心に据えて授業をデザインすることで、教師の発話は「活動を成立させるための最小限」でよいので、教師がたくさん話す必要がなくなります。

そのため、普段から授業を次のように設計しています。

- ①活動の目的 (Goal) を最初に明確化する
- ②手順 (Steps) を短い英語で提示する
- ③制限時間 (Time) を設定してテンポを作る
- ④言語活動の内容 (Output) を明確にして、指導と評価の一体化を図る



〈図2 付箋を使ってグループで英文を作成している様子〉



〈図3 生徒同士で学び合いをしている様子〉

4. 教師の発話だけでなく、 スライド等の視覚情報を活用する

生徒が英語で理解するためには、音声だけに頼らず、視覚情報（板書・スライド・絵・写真・アイコン・例文表示）を組み合わせることが重要です。これが「理解の足場かけ（scaffolding）」として機能し、生徒一人ひとりの英語での理解を支えることができていると感じています。

具体的な方法は次の通りです。

- ・ 授業の流れをスライドで固定表示
(Today's Goals / Steps / Time)
- ・ 活動中に使う表現を、カードや画面で提示
(I think..., I agree..., Could you...?)



〈図4 スライドを使って文構造について説明している様子〉

5. 教科書題材を活用し、多様な ジャンルで教師が発話する

教科書の語彙や文法は、本文の中だけで出会っても「使える」ようにはなりにくいと思います。そこで、教師が教科書題材を起点に、別ジャンルの発話（説明・比較・意見・要約・再構成・日常化）へ展開してみせることで、生徒が

「この語彙・文法はこういう場面でも使えるのか」と理解し、転用の可能性を高めることができるようにしています。

例えば、“I want 人 to …”を学習したら、
I want you to work in pairs.

現在完了形を学習したら、

Have you heard about the mountain fire in Australia?

間接疑問文を学習したら、

Do you remember what we studied last time?

このように自然に繰り返し使うことで、生徒は「文法説明」ではなく「運用例」として理解しやすくなるよう工夫しています。教師が複数ジャンルで発話することは、単なる英語量の増加ではなく、運用のモデル提示として機能します。

6. まとめ

All Englishの鍵は、

- ①教師の発話を質の高いインプットにしつつ、
 - ②授業の主役を生徒の活動に移し、
 - ③視覚情報で理解を支え、
 - ④教科書表現を多ジャンルで運用モデル化すること
- にあると考えています。

結果として、教師が話し続ける授業ではなく、「生徒が真ん中の」英語で動く授業になっていきます。

そのために、

- ・ 目標と手順が見える化する
- ・ 教師の説明を短くし、活動時間を確保する
- ・ 教科書表現を授業内の自然なやり取りで再利用する

この3点を意識して授業をデザインすることで、日々の授業をできるだけAll Englishで進められるように工夫しています。今後も生徒一人ひとりが英語で考え、自身の英語力の向上を実感できる、よりよい授業を実践していけるよう、さらに研鑽を重ねていきたいと思っています。

実践教育から生きる力へ!



2026年、開隆堂は100周年を迎えました

～ ご挨拶 ～

令和8年（2026年）3月に弊社は創立100周年を迎えました。ここまで歩み続けてこられたのも、諸先生方をはじめ、関係者の皆様や読者の皆様のご支援とご尽力のおかげにほかなりません。深く感謝申し上げます。

今後とも、わが国の未来を担う子どもたちのために、教育への貢献を果たして参る所存です。100年という節目を迎え、新たな歩み始める弊社に、より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

History ~ 2 ~ 英語の開隆堂

NEW PRINCEからSunshineに

「JACK AND BETTY」の編集が一段落すると、社長の中村寿之助は英語教員の免許取得のための講習会を各地で開催するとともに、「中村英語教育賞」を創設したり、「日本英語教育研究所」を設立したりと、日本の英語教育の発展を目指す。寿之助はいち早く視聴覚教育の重要性に着目し、レコード化や映画化を図っていった。

「JACK AND BETTY」は学習指導要領の改訂に合わせてその後も改版を重ねるが、昭和37年（1962年）には新しい時代の英語教育をめざして「NEW PRINCE READERS」が誕生する。

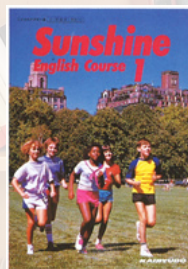
東京オリンピックを控えた戦後復興期には、開隆堂出版も着実な発展をとげ、多くの社員を抱えることとなる。



昭和37～40年度使用
「NEW PRINCE READERS」

昭和62年（1987年）には経済の国際化、情報化が進み、共通のコミュニケーション・ツールとしての英語が改めて重視されるようになり、新たな教育課題にも対応できる教科書が求められてきた。そこで誕生したのは、「Sunshine English Course」である。

平成から令和へ時代が移り変わり、今日の学校教育が大きく変化している。今を生きる子供たちのために、「生きた教育」をめざす教科書づくりを、これからも追求していきたい。



昭和62～平成1年度使用
「Sunshine English Course 1」



令和7年～
「Sunshine English Course 1」

本資料は「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

ENGLISH CAFE

VOL.10
Final issue

2026年3月31日 発行
<https://www.kairyudo.co.jp/>

非売品



開隆堂出版株式会社

本社〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03-5684-6111

発行 開隆堂出版株式会社 東北支社

東北支社 〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡3-10-7

サンライン第66ビル5階 ☎022-742-1213